

公 民 [倫理] (100 点 50 分)

2011 年 12 月 2 日 (金) 3 限 実施
後期期末考査
千葉県立長生高等学校 第 3 学年 ABCD 組
Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 4 桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3 年 D 組 1 番 0401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

第2問 次の文章を読み、下の問い(問1～問7)に答えよ。(配点 20)

紀元前6世紀ごろになると、ガンジス川流域に商工業が発達して、都市が成立し、クシャトリアの政治力やヴァイシャの経済力が高まった。農村的なバラモン教の権威は弱まり、前5世紀ごろには〔6〕とよばれる修行者たちが、独自の課題をかかえてみずから思索し、(a)『ヴェーダ』の権威に依存しない自由な思想を展開した。仏教の祖ブッダもこうした〔6〕の一人であった。

ゴータマ=シッダッタは、ネパールのシャカ族の王子として生まれ、不自由のない享樂の生活を与えられた。しかし、生・老・病・死という人生の苦しみについて悩みをいただくようになり、29歳のとき、この悩みの克服を求めて出家した。しかし彼は、6年間の苦行でも安らぎを得られなかった。修行に挫折し、快樂も苦行をも断念したはてに、この世界の究極の真理に目覚めさせたのは、菩提樹下での坐禅であった。ブッダとは「真理に目覚めた者(覚者)」を意味する言葉である。

ブッダは、人生は苦であるという事実の認識から出発する。彼によれば、現実の人生は、(b)生・老・病・死をはじめ、愛するものとはわかれ、憎むものとは出会い、求めるものは得られないなど、すべて苦しみに満ちている。ではこのような苦の原因はどこにあるのか。それは、〔7〕・瞋・癡の三毒をはじめとする、身心を乱し悩ませ、正しい判断を妨げる心の働き、すなわち煩惱にある。そしてその正体は、真理にそむいて自己の永遠の存在への執着をひきおこす渴愛である。したがって、この自己中心的な執着、すなわち我執をたって煩惱の炎を消すことによって始めて、いっさいの苦しみに解放される。しかし、そのためには、まず、(c)この世界を貫く真理を知らなければならない。

ブッダによれば、その真理とは(d)縁起の法である。魂は燃えあがる炎のようなもので、単独に存在する不変のアートマン(我)は存在しない。ブッダはこの真理にもとづいて、人生のさまざまな苦しみの根本原因が〔8〕にあることをつきとめ〔8〕をなくせば、人間の苦しみのすべてが解決されることを悟った。〔8〕とは、人生やものごとの真相に気づかないことである。つまり、この世界に常なるものはなく、(e)すべてのものはたえず生滅変化し、それ自体として存在するものは何もないということに気づかず、そのために自己にとらわれてしまうことになる。〔8〕の闇にあって人々は欲望を制することができず、意のままにならない人生に迷い苦しむのである。ブッダは、この無常・無我の法を悟り我執をたてば、煩惱の炎が消えた〔9〕の状態、清浄で平安な解脱の境地にいたると説いたのである。

問1 文章中の空欄〔6〕～〔9〕に入る最も適当なものを、次のそれぞれのうちから一つずつ選べ。

〔6〕

〔	沙門	婆羅門
	毘沙門	聖道門

〔7〕

〔	愛	貪
	色	受

〔8〕

〔	無我	無明
	無記	無私

第3問 次の文章を読み、下の問い(問1～問6)に答えよ。(配点 10)

ブツダの死後、ほぼ1世紀を経たころ、仏教教団は、ブツダの教えの解釈をめぐって、伝統をそのまま守ろうとする上座部と、新しい解釈を認める[16]とに分裂し、さらにこの両派から多くの部派が生じた。この部派仏教は自己の解脱を主眼とする出家中心のものであったが、紀元前後のころから、在家の信者たちを中心に、ブツダの(a)慈悲の精神を主眼として衆生の救済を重視する一種の宗教改革運動がおこった。彼らは、みずから大乘仏教と名のり、旧来の保守的な部派仏教を批判して小乗仏教とよんだ。

大乘仏教は、出家・在家を問わず、すべての人がブツダとなる可能性をもつことを認め、すべての人がブツダとなること(成仏)を目的とする仏教である。そして、ブツダになろうと誓い、修行にはげむ者を[17]とよんだ。[17]という言葉は、もともと修行時代のブツダを意味し、「悟りを求める者」をさしていた。しかし、大乘仏教では、出家・在家の別なく、ブツダになろうと誓い、自分の悟り(自利)を求めるだけでなく、同時に、それ以上に、他者の救済(利他)にはげむ者は、だれでも[17]とよばれるのである。したがって、[17]は、衆生の苦しみがたえぬかぎり、あえて成仏せず、衆生の世界にとどまり、衆生の救済にあたることになる。

[17]は大乘仏教の理想的人間像であった。その実践の内容は、(b)六波羅蜜に示されている。しかし、このような実践は愚かな者や意志の弱い者にはむずかしい。そこで、一般の多くの人々に対しては、すぐれた諸仏・諸[17]の慈悲と力を信じ、それにたよって救いを求めるべきことが説かれ、諸仏・諸[17]への信仰が高まった。大乘仏教は急速にひろまり、その(c)新しい思想をあらわす多くの經典(大乘經典)がつくられた。

問1 文章中の空欄[16]～[17]に入る最も適当なものを、次のそれぞれの～のうちから一つずつ選べ。

- | | | | |
|------|---|-----|-------|
| 「16」 | [| 正量部 | 大衆部 |
| | | 大乘部 | 説一切有部 |
| 「17」 | [| 如来 | 菩薩 |
| | | 阿羅漢 | 阿修羅 |

問2 下線部(a)に関して、慈悲の説明として最も適当なものを、次の～のうちから一つ選べ。[18]

- 人にされたいと思うことを行う思いやりの心。
- 家族愛にもとづくまごころと思いやりの心。
- 人にされたくないことをしないいつくしみの心。
- 人々に安心を与え、苦しみを取り除くあわれみの心。

問3 下線部(b)に関して、六波羅蜜の内容として最も適当なものを、下の～のうちから一つ選べ。[19]

- 信心 念仏 智慧 読経

問4 下線部(c)に関して、大乘經典として最も適当なものを、次の～のうちから一つ選べ。[20]

- 阿含經 中論 書經 般若心經

第4問 次の文章を読み、下の問い(問1～問5)に答えよ。(配点 14)

中国では、紀元前11世紀ごろ、殷にかわって周が政権をにぎった。周の王は、[21]を受けた天子として、封建的な社会秩序を定め、黄河流域を支配した。しかし、春秋時代の末期になると周の封建的秩序がくずれ、諸侯は富国強兵につとめ、競って有能な政治家や思想家を求めた。これにこたえて登場したのが、(a)諸子百家とよばれる思想家である。

孔子は、春秋時代末期の魯の国にうまれた。彼は、周王朝の封建秩序が崩壊し混乱する社会で、人間のあり方についての普遍的な原理をさぐり、これにもとづいて社会秩序をたてなおそうとした。孔子が、「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」とまで強調した「道」とは、この普遍的な原理、「人倫の道」であった。

孔子は、この道をまず仁に求めた。「仁とは何か」という弟子の問いに対して、孔子は端的に「人を愛すること」だと答えている。この仁愛は、うわべだけのたんなる愛情ではなく、人間に自然にそなわる家族的親愛の情であり、深い思いやりや慈しみの心である。仁はまず、親子兄弟の間の愛情である [22] として示されるとされた。さらに他人に対しては、仁は、(b)忠・恕という心のあり方として説かれた。

このように、仁は内面的、精神的な道徳であるが、その実践にあたっては、[23] という客観的な形式にかなうことが必要とされた。[23] はもともと、古代周王朝のしきたりであり、法律や慣習、作法などを含むもので、外面にあらわれる形式が重視される。その形式的な [23] の規範を、内面からささえるのが仁である。したがって孔子によれば、[23] は仁から出発してはじめて普遍的に価値あるものになり、たんなる空虚な形式的な規範ではなくなる。このように仁あつての [23] であると考えた孔子は、仁の徳を体得した者を (c)理想の人間像とした。

問1 文章中の空欄 [21] ~ [23] に入る最も適当なものを、次のそれぞれの ~ のうちから一つずつ選べ。

[21] [禅 讓 易 占
ト 占 天 命

[22] [孝 悌 別 愛
兼 愛 克 己

[23] [義 信
礼 智

問2 下線部(a)に関して、「守株」や「矛盾」の出典、『韓非子』が所属する学派として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。 [24]

法 家 陰陽家 名 家 縦横家

問3 下線部(a)に関して、墨子の説として**適当でないもの**を、次の ~ のうちから一つ選べ。 [25]

節葬非楽 兼愛交利 尚 賢 君民並耕

問4 下線部(b)に関して、「忠・恕」それぞれの説明として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[26]

忠は他人を欺かないこと，恕は自分を偽らない真心である。

忠は自分を偽らない真心，恕は他人を欺かないことである。

忠は他人への思いやりの心，恕は自分のわがままをおさえることである。

忠は自分のわがままをおさえること，恕は他人への思いやりの心である。

忠は自分を偽らない真心，恕は他人への思いやりの心である。

忠は他人への思いやりの心，恕は自分を偽らない真心である。

問5 下線部(c)に関して，孔子の理想の人間像として最も適当なものを，次の ~ のうちから一つ選べ。[27]

真 人 聖 人 君 子 大丈夫

[32]

規範としての礼を身につける努力と教育によって、人為的に矯正していく
規範としての法を身につけさせることによって、人為的に矯正していく
自然の本質としての道に従うことによって、作為を捨てる
天道としての理を学び、理に従うことによって本来の性を回復する

問2 下線部(a)に関して、朱子学の思想をあらわす言葉として、**適当でないもの**を、次の
～ のうちから一つ選べ。[33]

実行できない知は真の知ではないとして、真に知ることと実行することは同一であると主張した。

天から得た本然の性に理があり、この理をきわめ、気質の性による欲望をおさえて理に従うべきことを説いた。

万物の理をきわめて知の極致にいたる格物致知を重視した。

天地万物は、そこに内在する宇宙の原理である理と、その物質的な素材である気によって構成されていると説いた。

問3 下線部(b)に関して、王陽明の言行や手紙をまとめた作品として、最も適当なものを、次の
～ のうちから一つ選べ。[34]

四書集注

近思録

伝習録

資治通鑑綱目

第6問 次の文章を読み、下の問い(問1～問3)に答えよ。(配点 12)

老子の説く道とは、天地に先立ち、万物がそこから生まれ、そこに帰るすべての存在の根拠であり、老子はそれを仮に道とよぶ。いわば万物の母ともいべきこの原理は、それ自体としてはとらえられず、したがって元来語ることも名づけることもできないものであり、その意味で[35]ともいわれる。「道は常に為すなくして、而も為さざるはなし」と説かれているように、道は何もしない、それでいてあらゆる物事はすべて道のはたらきにほかならない。しかも、道それ自身は自然、すなわち他者によって動かされず、それ自身によってそうある絶対者なのである。

老子は、このような道が万物に超越し、かつ内在する宇宙はおのずから調和し秩序を保つのだと主張する。それゆえに、「大道廢れて[36]あり」というように、老子から見れば、儒家が[36]の道徳を強調するのは大いなる道がすたれたからであり、(a)人間の本来の生き方は、いっさいの作為を捨て道に従って自然に身をまかせ、私欲を去り、柔和で謙虚な心をもって人と接することとされたのである。

同様に政治も、治者は道に従い、無為・無欲のうちに人びとを自然にまかせることをよしとした。そのためにも、老子は、[37]を理想とした。

老子の立場をさらに徹底させたのが荘子である。人間の世界は善悪・美醜・是非などさまざまな対立・差別にいろどられている。けれども、よく考えてみれば、これらの対立・差別は人間の作為をはなれてはありえない。いいかえれば、対立・差別は人間の立場を通してのみ成り立つ相対的な世界にすぎず、ありのままの世界は、(b)何らの差別も対立もない、すべてがひとしい世界なのである。

荘子のいう無為自然とは、このような相対的な差別を生む人為を去って、ありのままの自然に従って生きることを意味した。それは、利害対立のうずまく戦国の乱世をはなれ、人為を超えた自然のはたらきに身をまかせ、(c)自由の境地に遊ぶことであった。荘子はこの境地に生きる者のことを[38]とよび、みずからの理想としたのである。

問1 文章中の空欄[35]～[38]に入る最も適当なものを、次のそれぞれの～のうちから一つずつ選べ。

- 「 35 」 [量 白
名 無
- 「 36 」 [仁 義 孝 悌
忠 恕 忠 信
- [37] [博愛主義の人びとからなる大国家
優れた人びとからなる小国家
愚かな人びとからなる大国家
わずかな人びとからなる小国家
- 「 38 」 [真 人 聖 人
君 子 仙 人

問2 下線部(a)に関して、老子の示した本来の生き方として**適当でないもの**を、次の ~ のうちから一つ選べ。[39]

柔弱謙下

上善如水

無為自然

修己治人

問3 下線部(b)(c)に関する『莊子』の記述として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選ずつ選び、(b)は [40] に、(c)は [41] に答えよ。

深く分かっている者はやたらに言辞を弄ばない。何かが言いたくなれば、そのよってきたる鍵と鍵穴に注目し、それによって気負いを挫き、気負いによる紛争を解き、自身の輝きすぎるところを和らげて、むしろ光と塵との差別がないほうに、自身をはこぶのである。これが玄妙な合一というものだ。

北海に鯤という魚がいる。全身何千里あるだろうか。計り知れぬ大きさである。この鯤が変身すると、鵬という鳥になる。何千里とも知れぬ胴体、翼を広げて飛びたてば、空はく黒雲に覆われたようになる。地上には陽炎が立ち、塵埃が舞い、生物の息がこもる。空は青一色である。青いのは遠いからか、ならば下を見れば同じように青いのだろう。

南海の帝を倏(しゅく)といい、北海の帝を忽(こつ)といい、中央の帝を渾沌(こんとん)といった。倏と忽はときどき渾沌の地で会った。渾沌のもてなしはとても行き届いていた。倏と忽は渾沌にお礼をしようと思い、相談して言った。「人間の顔には目耳鼻口に七つの穴があり、それで視聴飲食しているが、彼にだけは無い。ためしに穴をあけてあげよう」一日にひとつずつ穴をあけていったところ、七日目に渾沌は死んだ。

昔、莊周は夢で蝶になった。ひらひらとして胡蝶そのものであった。自然と楽しくなり、気持ちがのびのびしたことだった。自分が莊周であることはわからなくなっていた。にわか目覚めると、なんと自分は莊周であった。莊周の夢で蝶になったのか、蝶の夢で莊周になったのかはわからない。

第7問 次の文章A，Bを読み，下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 18）

A ルネサンスは総じて (a)「個人の発見」「人間と世界の発見」といわれる。ルネサンス人があくことなく追求したのは，もはや神への従順と献身ではなく，人間自体に備わっている能力と美であり，生の喜びにあふれた人間賛歌であった。彼らは，古代の知恵をよりどころにして人間的価値をまず肯定し，さらに，古典という模範的形式に生き生きとした表現を与えようと努力した。ここには，古典への単なる帰依の感情を超えて，人間の創造力を信じる姿勢があらわれている。

このようにして，しだいに自己の能力への自覚とその無限の可能性への確信を強めてきたルネサンス人は，人間の理想的なあり方を，自己の中にある多様で個性的な諸能力を発展させること，つまり，万能の人（普遍人）となることのうちに見いだした。その代表的な人物としてレオナルド=ダ=ヴィンチや [42] をあげることができる。ルネサンス期には，ギリシアの「善美の人」でも，中世の「信仰の人」でもなく，「個性豊かで多才な人間」が理想とされたのである。

ダンテは『神曲』において，罪に苦悩する人間に対する深い洞察を示した。(b)ペトラルカやボッカチオも新しい人間観を提示した。エラスムスは『愚神礼讃』で，カトリック教会の偽善を痛烈に非難し，神の摂理に対し人間の自由意志を強調し，それに反対するルターと論争した。(c)ピコ=デラ=ミランドラも『人間の尊厳について』の中で，人間は自分のあり方を自由に選ぶ力をもっているところに人間の尊厳がある，と説いた。[43] は『君主論』で，政治というものは，宗教や道徳から独立した世界をつくるべきで，それらの干渉をうけてはならないと主張した。

問1 文章中の空欄 [42] ～ [43] に入る最も適当なものを，次のそれぞれの～のうちから一つずつ選べ。

- | | | | |
|--------|---|----------------|-------------------|
| 「 42] | [| ラファエロ
ウィクリフ | アルベルティ
レオ 10 世 |
| 「 43] | [| マキャベリ
ホップズ | トマス・モア
フィチーノ |

問2 下線部(a)に関して，これらの観点を著作『イタリアルネサンスの文化』の中で初めて示した人物として最も適当なものを，次の～のうちから一つ選べ。[44]

フッサール ウェーバー ホイジンガ ブルクハルト

問3 下線部(b)に関して，ペトラルカが人文主義の研究対象とした古典の著者として最も適当なものを，次の～のうちから一つ選べ。[45]

プラトン ホメロス キケロ トマス・アキナス

問4 下線部(c)に関して、『人間の尊厳について』からの引用文として最も適当なものを、次の ~ のうちから一つ選べ。[46]

イギリスの羊は、この頃では、なんでも途方もない大食いで、その上荒々しくなったそうで、そのため人間さえもさかんに食い殺しているとのことだ。

おまえは墮落して下等な被造物である禽獣となることもできる。おまえは自分の意思で決定して、より高等な園、言いかえれば神の園に再生することもできるのだ。

知性をすでにとりこにしまって、底に深く根を下ろしているイドラ及び偽りの概念は真理が入ってくるのを妨げるであろう。

君主たるもの、狐と獅子を範とすべきである。なぜならば、獅子は畏から身を守れず、狐は狼から身を守れないがゆえに。

B 1517年、ルターは、従来の教会のあり方に抗議して「95か条の意見書(論題)」を教会のとりらに張り出した。これが宗教改革の発端となった。ルターの思想と行動は、教会や領主の圧迫に苦しんでいたドイツの多くの農民や手工業者たちに支持され、急速に各国に波及していった。

ルターは、人の罪が赦され、神によって正しい人間として認められるには、贖宥状の購入とか、教会の定めた戒律を守るといった外面的な善行は必要なく、(d) ただ各人の内面的な信仰のみが必要であると主張した。またルターは、信仰のよりどころとするものは、[47]のみである、という立場に立ち、聖職者の権威を否定して神を信じる者はすべて等しく司祭である、という万人司祭説の考え方をとった。

カルヴァンは、ルターの思想をさらに実践的に徹底させた。『[48]』によれば、神は絶対者であって、すべての存在は神の摂理によって導かれている。各人の功績や価値にまったく関係なく、人間の救いはあらかじめ神の自由意志によって決められている。それでは人間は救いの確かさをどのようにして知るのか。カルヴァンによれば、人間は神の道具として、神の栄光のためにはたらかななくてはならない。すべての職業は神から与えられた天職(神の召命)である。それゆえ、人間はみずからの職業にひたすらはげむことによるのみ、神の救済の予定を確信できるのである。

[49]が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにしたように、カルヴァン主義は「職業人(専門人)」という、ルネサンスと異なる新しい人間の理想像をつくり上げた。禁欲・勤勉・正直などの職業倫理は、これまで卑しいものとされてきた営利活動の正当性を認めることによって、資本主義や市民革命の精神を育てる役割をはたした。

問5 文章中の空欄[47] ~ [49]に入る最も適当なものを、次のそれぞれの ~ のうちから一つずつ選べ。

[47] [律法 伝承
教会 聖書

[48] [神の国 キリスト教綱要
キリスト者の自由 神学大全

